

電友会四国連合会報

第 38 号

57. 4



目次

土佐随想……………	高知電気通信部長……………	二
つましく心豊かに……………	電友会四国連合会長……………	二
共済会だより(七)……………		三
事務局からのお知らせ……………		四
電電公社人事異動……………		五
会社だより……………		五
随筆……………		五
上田 昇	遠藤 良治	大西 瓶子
大森 勇	木野戸繁行	小内 健生
佐々木馬吉	島田 静男	須藤兼太郎
田中 義隆	田井 芳信	名越ミエ子
政本 邦興	森 常夫	原田 照男
森谷岩太郎	山下 茂	横山 竹義
訃報……………		七
表紙のことば……………		三
川 柳……………		三
俳 句……………		三
編集後記……………		三

土佐随想

高知電気通信部長

曾我部 龍 夫



南国の炎天下で
軽快なりズムにの
って踊り歩いたよ
さこい鳴子おどり
もつこの間のよ
うな気がするの
高知に赴任して早
くも八ヶ月が過ぎてしまいました。懸案の施
策事項も着々と進み、真剣に取り組んでく
れている職員に感謝をし乍ら、楽しく生き甲斐
を感じている土佐での毎日であります。

電友会の皆様方にはお変わりございませんか。
先日、会長の泉様から「何か書いて出せ」
とのご要請がありましてお引受けいたしました。
たもの文才の無さに悩まされ、落ち着くと
ころは次のような思いつくままのものになり
ました。乞許!

○『土佐の酒』 ご承知のように高知は、怒
濤うず巻く太平洋を前にして、自然の美し
さを誇る景観と、新鮮な魚、山野の幸、にめ
ぐまれ、それに土佐酒があります。

呑むにつれ、酔うにつれ、陽気で愉快にな
り唄となりませす。「お流れ頂戴」「お一つど
うぞ」も高知では、「一つ一杯」と盃が出さ
れる。出された盃は一気に呑んですぐお返し
するのが礼儀で盃を出せば出す程、お酒が飲
めるようになっており、まさしく「ギブ・ア
ンド・テイク」を地で行っております。

土佐の酒は、人との触れ合いで欠かせない

ものであります。最近では、酒量も減り、いさ
さか弱くはなりましたが、土佐の酒を愛し、
常に酒の場の雰囲気を楽しみたいと念じて
おります。

「会社もいよ／＼裸になって、「社会の心を
公社に取り入れ、公社の心を社会につたえる」
時がやって来ましたが、高知の酒礼の心である
「一つ一杯」の気持を仕事に生かしていき
たいと思っております。

○『健康とゴルフ』 ゴルフを始めてもうか
れこれ二〇年あまりになります。腕も上ら
ず、現状維持にきゅう／＼としております。
最近はそのままにならず急転直下、ブ
ービー賞といったところですが、高知はゴルフ
場が少なく、あまり出来ないだろうと観念し
ておりましたが幸い愛好者の方からおさそい
を受けて結構機会にめぐまれております。

今まではただひたすらゴルフの良さを味わ
い健康のためにゴルフをするなんてことは、
毛頭考えたこともありませんでしたが、最近
の無様な結果をみると、足腰の弱り、精神
的な脆さなど熟年の悲哀が身にしみ、ゴル
フは心と体の健康が大切であることを改めて
痛感しております。ゴルフ談議でついでこ
んな愚痴をこぼすことがあって最近「実践ゴ
ルフ健康法」なる、本を頂きました。

「健康に良いゴルフをするためには、十分
な休養とバランスのとれた栄養が大切である。
又精神力が七割と云われるゴルフであるか
ら日頃、自分の感情をコントロールしうる冷
静さと心のゆとりを養っておくよう心がけね
ばならない」とあった。

考えて見ると思いあたる節も多々あり、単
身赴任で落ち入り易い不摂生を戒め、健康の
維持に留意し、豊かな心で充実した毎日を送

るよう心がけたいと思っております。

つつましく心豊かに

電友会四国連合会長

泉 節太郎

昭和五七年度の恩給年金の改善については、
未だ確定的なことはわかりませんが、聞くところ
によれば、仮定俸給に対する改善率は従
来よりかなり低く、しかも支給開始期は五月
（従来より一カ月おくれ）になる見込だ、と
のことです。

平均改善率が低いということは、昨年の物
価上昇率が低かったことにもよりますが、
支給開始期のおくれとともに、行政改革とい
う、政府の政策の影きよによるところもあ
るかと、思われます。

行政改革と言え、ご承知のように、昭和
五七年度を第一年とする三年間において、政
府の支出を極力少くし、政府が今抱えている
多額の赤字国債を償還することによって、国
家財政の立て直しをはかろうというものであ
りますが、それが政府の一般政策であってみ
れば、年金も亦、その影きようを受けざるを
得ないということかと思えます。

そういう意味から言え、ここ三年間は、
改善についての大きな期待は持てないのでは
ないかと思えます。

それでは、三年を過ぎればよくなるのかと
言え、これもまた甚だ怪しいものがあるやに
思われます。

と言うのは、日本人の高令化という、社会
構造的な現象によって、各種年金とも、かな
り厳しい現実に当面せざるを得ない、と思わ

れるからであります。

昨年一月五日の朝日新聞の記事によれば、公的年金のうちで、最も財政的にゆとりのある厚生年金において、五六年三月現在の加入者（掛金をかけている者）一二・五人に対し、老令年金受給者一人という割合であるが、これが昭和七五年には四人に一人、八五年には三人に一人という割合になる。つまり、七五年には加入者四人で年金受給者一人を支えなければならぬ、と言っています。

また共済年金のなかでも、国鉄共済年金は、現行の給付水準を維持できるのは、昭和五九年までで、その後のことについては、完く目途が立っていない、とも言っています。

わが電通共済組合は、三公社のうちでは、比較的財政事情はよい方だと言われているが、それが、それでも五六年三月末の組合員数は、三二万五〇〇〇余人で、年金受給者は五万八〇〇〇余人、両者の比率は約六対一、そして今後年金受給者は漸増の傾向であるに對し、年々の職員採用数は減少の傾向にあると言いますから、将来は五人または四人で一人の年金受給者を支えなければならぬ日が来るのも、そう遠くはないのではないかと思われます。そういうことを考えますとき、お互いに年金改善へ向って努力はしなければなりません、それをしてもなお、過去一〇年来のような改善は望むべくして、実現は困難ではないかと思われます。

そこでわれわれは、将来たとえ年金の改善がはかばかしくなくとも、甚だしく困窮することのないよう、今から考えておくことが必要ではないか、と思います。

それには、「生活をつつましく、健康で、心豊かに」生きることをモットーに、各人そ

れぞれに工夫することが大切だと思います。生活をつつましくすれば、生活費は少なくてすみます。また、健康であれば医療費などへの出費を免れるし、肉体的な苦痛も味わわないうですみます。また、たとえ物質的には恵まれないとも、心の持ち方次第では、内面的には豊かに生きてゆけるからであります。

共済会だより (七)

◎五七年度退職者文化活動計画のあらまし

概要、次のような計画を進めたいと考えています。多数の方々の参加を期待しています。一、文化講演会
実施時期を含め、昨年に準じ四県庁所在地で開催します。
二、サークル援助

昨年同様、五六年度中の活動実績と、五七年度の予定計画を提出していただき、その内容により援助額を決定することになっていますが、発足頭初に比べ年々サークル数、会員数とも増加しており、予算等との関連もあって今年度は、援助額の見直しを行い減査定をせざるを得ない実情でありますので御了知願います。

三、電電OB大学（一般教養科）

松山近郊の退職者を対象に過去四年間園芸教室を開設しておりましたが、五七年度から一般教養科に切り替え従来の方法で文化講座を開設することにしています。

この会報が発行される頃には、受講ご希望の方々には御案内が届いていると思います。その概要は次のとおりです。

回	日	時	テーマ	講師
1	14時・15時・16時	15分	心のもち方と人生	番町公民館館長 法龍寺 住職 栗田伸美
2	13時・15分・21分	15分	時事問題	愛媛新聞社 編集局次長 上田正明
3	6時・18時	18分	天然植物を尋ねて（伊予三島市 富郷溪谷）	愛媛県さつき協会 理事 渡部義綱
4	9時・17時	17分	中予史跡探訪	愛媛県史編纂委員 重川家俊
5	9時・15分	15分	鹿野川ダム散策	見学コース（栗拾い）
6	13時・15分・19分	30分	情報化社会の問題点	南海放送 副本部長 大内信也
7	13時・17時	15分	老人と健康	葉草の大家 宮内信雄

詳細については当相談所へおたづね下さい。四、趣味の作品展
退職者談話室「ともがき荘」を利用し開催することになっています。皆さんの出品を期待しています。

◎「美しいふるさとづくり」のすすめ

- みんなで力をあわせて美しいふるさとづくり活動をすすめてみましょう。
- 温かい心の輪をひろげましょう。
- あいさつ運動や独居老人、からだの不自由な人や、ちえおくれの人への愛の手をさしのべましょう。
- 地域の公民館活動やグループ活動に積極的に参加しましょう。

◎高知で文化講演会開催

師走の十二月五日午後、共済会主催による恒例の文化講演会が、高知市菜円場の住宅総合ビルで開催された。

「やりゆうかよ」「どうぜよ」のあいさつが飛び交いお互の近況を語り合う開演前のひとときはあまりにも短かい時間であった。

講演は高知短期大学教授の外崎光広先生が「自由民権運動と土佐」と題して、百年前の明治十四年は自由民権運動が最高潮に達し明治政府が転覆の瀬戸ぎわに追いつめられた年であると前置きして、自由民権の思想は土佐に生れ、当時の運動家の多くが土佐の立志社に学んでいる。

明治憲法は、土佐立志社の植木技盛が草案したもの、伊藤博文等の手によって修正され制定されたものである。また、戦後の日本国憲法もアメリカから押しつけられた憲法だとのしる声も高いが、それは全くの誤りで日本国憲法制定にあたって占領軍との間にやりとりがあったことは事実であるが、土佐の偉人植木技盛が草案した明治の自由民権の思想がその土台にあると当時の史実、根拠等具体的な資料を展開!! 学者としての説を東北人らしく熱く訴え予定の時間を過ぎて、百年前生命をなげうって明治絶対主義権力とたたかった土佐の先輩たちが流した血と汗が日本国憲法の中に結晶していると結び、深い感銘をうけた。



事務局からのおしらせ

会員証の発行について

従来、公社退職者又はその被扶養者が保養所等を利用する場合、利用者が共済年金証書番号等を提示のうえ共済組合事務担当者の確認を得ておりますが、遠隔の地にお住まいの場合など、大変ご不便がありましたので、このたび公社のご理解を得て、会員の身分証明書に代わる会員証を発行することとし、その会員証を呈示することにより直接保養所等を利用することができるようになりました。

電友会四国連合会では、電友会四国連合会会員証を作成しましたので、ご希望の方は各県の会事務局へお申し出になり交付して下さいます。

会員証の扱い等については次のとおりです。

- 1 会員証を使用できるところ
 - (1) 公社諸機関の入門
 - (2) 公社保養所の利用
 - (3) 公社の会館、クラブの利用
- 2 会員証使用の際の心得

- (1) 公社諸機関に出入する場合
 - ア 会員証を受付に呈示すれば身分証明書又は入門証と同様に扱う。
 - イ 利用券に会員証番号を記載するだけでよく、その他の証明方法を必要としない。

イ 直接保養所等に出向いてよい。

この場合は会員証を呈示すること。

5 会員証発行開始日
昭和五十七年四月一日からお申し出により発行します。

表

電友会四国連合会会員証	
会員証番号 _____ 号	
氏名 _____	年 月 日生
住所 _____	
電友会四国連合会長 印	
(年 月 日発行)	

裏

注 意

- 1 本証は本人及び被扶養者以外使用できない。
- 2 本証を紛失、き損、又は氏名、住所等変更のときは申出ること。

④ 1 大体名刺位の大きさ
2 会員証番号には県名を表示する次の記号を記入する。

- 愛媛……………愛
- 香川……………香
- 徳島……………徳
- 高知……………高

4 会員証取扱い上の注意

- (1) 貸与または譲渡しないこと。
- (2) 次の場合は事務局へ返納すること。
 - ア 会員の資格がなくなつたとき。
 - イ き損して再発行したとき。
 - ウ 氏名または住所を変更し再発行したとき。

電電公社 人事異動 (敬称略)

四国電気通信局職員部長 (五七・一・一二)
 藤野 統夫
 (五七・一・二二)
 西野 博
 愛媛電気通信部長
 石田 英博
 四国電気通信局監査部長
 岡 繁一郎
 同 営業部長
 川上 正幾
 同 建設部長
 新田 義孝
 同 保全部長
 向山 晴凱
 同 経理部長
 天野 修二
 同 資材部長
 浜口 友一
 同 データ通信部長
 田中 章夫
 徳島電報電話局長
 西本 寿恵一
 四国電気通信局付
 大塚 忠直
 同 木内 康雄
 同 本田 実
 同 (五七・二・九)
 小林 稔彦
 四国電気通信局秘書課長
 小林 稔彦

公社だより

生きている証拠を

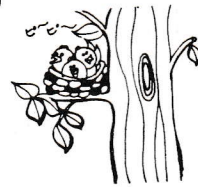
四月は年金受給資格を確認する月です。共済組合四国支部から送付された受給資格確認のハガキに、市町村長の印をもらい、お忘れなく期日までに必ず出して下さい。提出しなかったり、おくれた場合年金を受けられなくなることもあります。

- 証明は五十七年四月一日以降であること
- 提出期限 五十七年四月十五日(必着)
- 提出先 千七九〇 松山市一番町四一三 四国電気通信局職員部厚生課共済係

随 想

謡曲「羽衣」に思う

上 田 昇 (松山)



「風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の、浦人騒ぐ波路かな
 お馴染の「羽衣」の曲。
 謡い進んで、天人が、漁夫白龍と、羽衣を返してほしいと、問答をする。

白龍「暫く、承り及びたる天人の舞楽、只今此処にて奏し給はば、衣を返し申すべし」

天人「嬉しや、させは、天上に帰らん事を得たり、……さりとては、先づ、返し給へ」

白龍「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさで、そのままに、天にや上り給うべき」

天人「いや、疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」

白龍「あら恥かしや、さらばとて、羽衣を返し与うれば」

このところを謡うたびに、私は、ああ、人間の世界は、汚れた見苦しいものだと考えさせられる。

日々の新聞には、「だました」「だまされた」「だましあう」との、記事のなんと多いことであろう。

白龍のように、気付くならば、このような記事にならなかつたであろうにと。

四 季

遠 藤 良 治 (徳島)

お互い、日々反省をし、天上のようにまてならなくとも、住みよい世の中になつてほしいものである。

春。それは私にとって五七回巡ってきたことになる。

節分・立春・雨水・啓蟄・春分・清明と暦のうえでの節気・雑節を経て、やってきた春である。

春ともなれば、花芽が動き、若葉がもえ、我が家の菜園も色づく。「春の晩飯後三里」ということわざのように、食後の庭いぢりも楽しい。春は陽気が一ぱい。自然の現象は忠実そのものである。

日本の国は、四季がハッキリしていて、四季折々の野菜やくだものが店頭を飾る。まことに恵まれた国である。

ところが、農業技術が進んで、化学肥料や農業を使つての、ハウス栽培や抑制栽培が盛んに行なわれ、今では季節はずれの野菜などが、いつでも容易に入手することができ、私達の食生活を豊かにしてはいるが、反面、これらの季節感が失われ、四季が与える恩恵も忘れられつつある。

最近の子供に、夏には西瓜やキュウリが、秋には菊が、と教えても実感がわいてこない。結局は、そんなものかナ!……と頭でおぼえる恰好となる。おおげさにいえば、断絶の季節とでもいふべきか。

世界には、常夏の国、白夜の国などさまざまな国があり、それなりの良さを持つているのではあるが、四季に恵まれた日本で、四季を楽しむながら、自然の摂理に従い、農薬

などのない自然の栽培で、本来の味覚を味う生活をしてみたいと思う。

初 釜

大 西 瓶 子 (高知)

鏡川の清流に沿って、車で廻ること約三十分のところに宗安寺がある。川辺りのお不動様の鳥居の前を登ると、山苺や菽柑子の垂れる道の尽きるところが宗安寺山荘である。

閑静な山荘の玄関の三和土は綺麗に掃かれ、水が打ってあった。茶会にはまだ時間があつたので裏庭へ出て見た。敷石を伝って、左側に、今日の初釜のためにしつらえたであろう真新しい竹樋の蹲踞がかかり、生籬の谿の向うに松林の峯が聳えて、正月にはめづらしい暖かい青空が拡がっていた。

濡縁に腰をおろして、前山を眺めていると、フト嵯峨の光悦寺の庭から仰いだ鷹ヶ峯を想い出していた。

やがて茶室に案内されたが、初釜は初めてのことであり、一つ一つ作法を教わりながら座に着いた。主客と云う緊張感から我ながら堅くなっているのを覚えた。女性ばかりの二十人余の茶会であったが、度胸を決めて座を見廻すと、句会で顔見知りの人達が多数を占めていたのどいく分気が楽になった。

床には柳条が活けられ、若芽が長々と垂れて裾を引き、掛軸の式紙の白光(裏千家十四代家元筆)の字がとも印象的であり、障子を透して畳にのびる冬の日射しの中に、初釜の湯がころころとたぎって湯気をあげていた。

初釜や高舞う嶺を離れし

お祝のお酒と懐石料理が出て、濃い茶をいただいたあと、一同露地草履で庭に出た。誰かが苺が咲いていると云う。見ると沓脱石の

もとに一輪の冬苺が可憐で、女性の晴れ着に露路草履がよく似合っていた。

苺咲く晴れ着に軽し露地草履

談笑の庭へ、山荘の奥から響くドラを合図に、つくばいを使い、もとの茶室に戻った。今度は最初の緊張もすっかりほぐれて気が楽であった。床の軸が替えられ、備前焼であるうか、銹た壺に寒椿と土佐みづきが活けられ、清楚な雰囲気であった。ひとわたりお点前が終り、正月にふさわしい詩吟や謡が披露され、なごやかなうちに山荘を辞したのは、山の日がもうすっかり西に傾いた頃であった。

つくばいに足袋を濡らしぬ初茶会

昭和五十六年の皇居奉仕をふりかえって

大 森 勇 (宇和島)

電電公社を昭和四十年に退職いたしました。その年愛媛県皇居奉仕団副団長に推薦され五十四年まで努めてきましたところ、団長が急逝されたため、五十五年から団長として皆様方とともに奉仕をさせてもらっており、今にして思えば、団長が皇居奉仕について宮内庁への複雑な手続きや、旅行会との打合せ或いは参加者との連絡などご一身で運んでおられたのに、副団長として十分なお手伝いができなかったことが心残り、ただただ合掌するのみでございます。

私の奉仕団参加は、今年で二十一回になりますが、それもこれも健康なればこそであり、在職中仕事から体をきたえられたことが今役に立っているものと思えます。

愛媛県皇居奉仕団は、男女合せて六十名です。宿舎は、代々木日本青年文化会館になっています。四日間の奉仕にはいります。

朝七時宿舎を出て先づ靖国神社に詣で、皇

居枯梗門で検問のあと総明館にはいり、全国の奉仕団と合流しここで侍従から皇居内での行動上の注意事項の説明を受け係官の先導で「かしこころ」を拝し、ついで新宮殿のご説明を聞き、午後は清掃に従事し四時に退出して国会を見学し第一日が終わりました。

二日目と三日目は東宮御所の庭園の清掃をいたしました。皇太子さまご夫妻にお目にかかることができました。四日目は皇居に参上し、天皇、皇后さまからお言葉を賜わり、宮内庁で記念品をいただき、万感の思いで皇居を退出いたしました。奉仕中に二重橋で団員一同記念撮影もしました。

翌日は団員揃って東京を発ち、高崎の観音様及び榛名神社に参拝、榛名湖畔伊香保を見学して水上温泉に投宿し、夕食に小宴会を開いて無事奉仕終了のよろこびと開放感で心なごむ一時を持ちました。次の日は、三國峠を越え新潟に出て佐渡ヶ島へ渡り、両津で一泊いたしました。小木港で「タライ舟」に興じたあと、帰路は直江津に上がり大阪を経て海路松山につき、一同十日間の無事を喜び合い、又の日を約して解散いたしました。

心配ごと相談の窓口から

木野戸 繁 行 (高松)

私が高松市の心配ごと相談所の相談員になったのは、高松市に常設の相談所ができた昭和五十二年十月であった。

それから四年有半月一回相談所に出てゆき、訪れてくる方々と話合ってきた。熱海で開かれた心配ごと相談全国大会に出席する機会にも恵まれた。

相談所でのかずかずの話合いの中で特に心に残る事例に次のようなものがある。

ある日、サラ金の問題で三件の相談が持ち込まれたことがある。いずれも妻と子供を残して主人が蒸発してしまい、朝に晩にきびしい借金の取り立てになやんでいるという訴えであったが、その経過や結果が三件とも余りにも似ているのに驚かされ、残された家庭の悲惨さに胸がふさがる思いであった。

今一つは酒に負けた人の相談である。平素はおとなしい人が、一旦酒がはいると変ってしまう人が意外に多いのに驚く。

自分で十分承知しておりながら酒の誘惑に勝てず、家の中を火の車にしてしまつて家族を苦しめているという人、世の中から酒が無くなればどんなに幸だろうと泣きながら訴える子供つれの夫妻の相談、断酒会に入つて頑張つてみてはと答えるだけでは答えにならないのがこの問題である。

訃 報

次の方が亡くなられました。謹んで哀悼の意を表しご冥福を祈ります。

氏名	死亡日	行年	所属
新 芳太郎	56・12・17	八〇	高知
二 神 武弘	56・11・26	八四	伊予
島 崎 友文	57・1・22	七四	高知
窪 田 数男	57・2・15	七八	土佐
吉 村 正喜	57・2・21	七二	高知
高 橋 清長	57・2・23	六一	大洲
増 田 鉄雄	57・3・2	七二	香川県綾歌郡
内 田 龍雄	57・3・3	七九	松山

小 宴

小 内 健 生 (高知)

某日午後、高知駅のプラットホームにO氏とK氏それよといった顔ぶれがそろつた。

北風のホームは少し寒かつたが車内にはいとむっとする程スチムがきいていた。一時間て目的の駅に着いた。この町は古い城下町で、県下三大祭りにあげられる八幡様の神祭と、県下で一、二を誇る古い創業の造り酒屋で有名である。駅から五分程で昨年新築したばかりの目的の旅館に着いた。離れに案内されるとすでに席が設けられ、卓上には料理を盛りつけた皿が並べられていた。

中央に鍋がすえられ各人の席には二〇センチ以上もある鮎の塩焼、鮑、鮪の刺身が並び、鍋の横に魚の切身が太い皿に盛られ、白菜や春菊などの野菜、椎茸、しめじ、豆腐を盛り合せた皿鉢が置かれていた。

酒がきて宴が始まった。気の置けない友人が寄り、食べ、語る、この小宴は一番楽しい一時である。

高知ではほとんど刺身を口にしないO氏が「こりゃ美味いのお、刺身を好かん僕も大分食うたぜよ」と言う。今朝漁師が釣ってきた鮪の刺身である。歯ざわりが良く、生ぐさは全く無い。旅館の主人が川で獲ってきたという落ち鮎もいい味であった。不思議に鮑が堅くない。煮方にコツがあるという。

宴なかばO氏が自作の俳句を式紙に書いた。氏が所属する俳誌の最近号の巻頭を飾つた二句で、流麗な句はこの宿を訪れる心ある人達の目を愉しませてくれることだろう。あつと思つた間に時が流れもうお開きの時間が来て、楽しい小宴を閉じた。

中世への旅

佐々木 馬 吉 (窪川)

私が「窪川の神々」という本を出したのは昭和五四年九月で、退職三年目のことであつた。そして翌五五年一月には「窪川のみほとけ」を出版した。

この二冊の本は、中世に生きた農民の生きざまを私なりに描いてみたく、特に農民の精神生活というか信仰生活に焦点をあてて書いたつもりである。

いま、私は、中世末の農民の経済生活に探りを入れてみようと思つて執筆に努めている。ここでいう中世末をもう少し正確に言えば、天正一六年(一五八八)ごろのこと、長宗我部地検帳ができた頃でもある。

来年は、中世後期の地頭と農民のかかわりに眼をむけてみようと思ひ、その資料の蒐集にも心がけている昨今である。

このように私が中世を追い求めるのは、中世に強い興味を懐いているからであり、その原因は二つある。一つは日本史のなかで中世史が比較的手抜きになつていふように思うこと。二つ目は、特に農民が疎外されていると感じるからだと思つている。

ところで明治から戦前までは華族制度というものがあつた。これらの華族は江戸時代には大名である。この大名を更に中世後期まで遡ると、柳田国男の著書によるとその八五%が乱破だといふ。乱破とは無頼漢であり群盗もいた。その一例が蜂須賀小六である。

將軍家はどうか、徳川家康の祖父は旅芸人であり、幼い家康の父をつれて三河国の松平へ入婿したものといわれている。このようにみえてくると、中世史の手扱きは、

意外にこの辺に原因があったように思えてくる。だから私は中世が面白く、その旅をつづけるわけである。

人生の春

島 田 静 男 (高瀬)

電友会員に加えさせていただと同時に、百姓幼稚園に入園、文字どおり晴耕雨読の一年間が過ぎ、再び春が訪れてまいりました。預けておいた僅かばかりの田を返してもらい、荒れた山畑をもあわせた耕作を、ご近所篤農家の指導を一つ一つ受けながら汗を流しておりましたが、何しろ再スタートのこととてトラクター等、農機具への投資もあって、目下のところ赤字経営が続いております。

地域の役目も、あれこれ持込まれお引受けしない訳にはまいらず、公社を卒業したら、いろいろの趣味に本格的にとりくみ、またパカンスも大いに実行したいと欲ばっております。思いうようにはなりませんけれども、「日々は好日」楽しく、そして何となく慌ただしく過しております。

嬉しいことには、適度の肉体労働のためか、或は単身赴任時代の不養生が妻のコントローで矯正できたせいか、血圧も下がり健康で快的な毎日を送っていることです。

(通病の先生は、「ストレスが解消できた所為でしょう。あなたの場合は、退職されて本当によろしかったですね」とおっしゃいました。……)

いづれにしても今後とも健康で明るく「人生の午後」を「人生の春」と読み変え、エンジョイしたいものと考えております。

春がきた

須 藤 兼太郎 (穴吹)

春がきた 春がきた どこにきた
山にきた 里にきた 野にもきた
こんな小学唱歌を口ずさみたくなる今日この頃です。

春夏秋冬四季それぞれに恵まれた日本で、私にとって一番待ち遠しいもの一つは、この日本の春の到来であります。

暦にいう二十四節気のトップは「立春」であります。この立春は季節の分れ目である節分の翌日とされており、季節的にはまだ冬の盛りではあります。『春の気が立つ』といわれております。

そして、その十五日後を『雨水』といい、この頃から雪よりも雨が多くなり、草木が萌芽のきざしを見せはじめ、さらに十五日後を『啓蟄』といい、冬ごもりしていた虫たちもぬくもりを感じて穴から這い出してくる頃だといわれております。

それから、『春分』。暑さ寒さも彼岸までといわれているお彼岸を中心に、四国路の春はお遍路さんとともにやっております。

日増しに日照時間も長くなり、草木は本格的に萌え出で、『清明』の気が天地にみぎり、桜前線は日本列島を北上し、爛漫の季節となります。まさに、万物躍動の春です。

長年お世話になった電電公社を昨春退き、今私は、みな様の共済会でのしく勤務させていただきます。帰りに帰る里での定住をきめこみ、余暇をみては、幼い頃駆けめぐる野山、小魚つりに興じた四国三郎の清流相手に、存分に退職一年目の春を愉しんでおります。

ネクタイ

田 中 義 隆 (松山)

昔はじめてネクタイを結ぶとき、父に教えてもらい鏡の前で苦心した。慣れると手早く結べるというのに、それが癖になって鏡を見ないと結べない。

若い時から、自分でネクタイを買ったことがない。売り場で物色するのが嫌で、美人の店員だったりすると初手から寄りつけない。といってプレゼントをしてくれる彼女はおらず、家内任せのをぶらさげていた。娘が長じてやっと父の日のプレゼントになった。

初老のころ、一つの夢を描いた。白い頭に赤いネクタイはさぞ似合うだろうと思った。そして半白から全白近くなった今、その洒落気はとうに失せ、ここ数年ほとんどネクタイを締めない。物ぐさからのノータイである。

まるで首輪のない犬のように、せいせいする。もっとも首輪のない犬は、食と住の保証がない。その点こちらは安心で、たいていの会合もそのまま出席する。ただし一昨年の春、プレゼントの娘の結婚式に節々を曲げてネクタイを締めた。この春もやがて甥が結婚するから、ふたたび節を曲げねばなるまい。

古希を迎えて

田 井 芳 信 (松山)

強いて歳のことは考えないようにしていましたが、昨秋愛媛電友会総会の席で「古希」のお祝を頂戴し、今さらのように老人の組に入ったことを否定できなくなりました。

「人生七十古来希」とは杜甫の詩にありますが、高齢化が社会問題になっているとき、私もその高齢者に組入りし、生涯の終局に近

づいて、この七十年間を振り返ってみますと感慨無量の思いがいたします。

苦しい思い出だけが残っている三等郵便局時代、そして徴兵検査、甲種合格で普通寺の輜重隊に特務兵として入隊、除隊後は普通局で仕事に追われどろしの忙がしい割に給料が上らず、ついには召集逃れに満州国軍に身を投じ、零下三〇度のノモハンの雪の地下兵舎で五ワット無線機で国境監視情報通信に携わり、終戦になってからは運良くソ聯に連行されることもなく、長男を失う悲運はみなが裸一貫ながら引揚げて復職することができ、それから楽しく勤務をさせてもらいました。定年退職後も第二の職場までお世話になり有難いことと感謝しております。

以上のように波瀾に満ちた苦しい一生であったと思います。しかし一方戦前、戦中そして戦後の尊い体験に生きることができた生れ合せであったとも思います。

吉良のみかた

名 越 ミエ子 (松山)

愛知県に住んでいる末娘は、当節はやりのキャリアウーマンとでもいうのか片道一時間の列車通勤を苦にもせずせせと働きに出ているようである。一度訪ねた折、機会あってその通勤列車に乗ることになった。交通の発達している地方にしてはめずらしく「三河線」というローカル色豊かな列車で古ぼけた赤色

の車体の正面には大きく「吉良吉田」と書かれてあった。「吉良って忠臣蔵みたいな地名ね」と冗談まじりに娘に言う。「そう、この終点に吉良上野介がおったんよ」という答えが返ってきた。浅野内匠頭が赤穂というのは知っていたけれど、あの悪玉がこんな所出身だとは……ちょっととした驚きであった。そういうえば上の娘は以前岡山の国鉄赤穂線ぞいに住んでいたこともあるし何やら不思議な因縁だと思っていると、「ありま吉良上野介のことを悪口言うたらいかんよ。ここいらの人には名君として慕われとったんだからね」と娘が小声でこう言った。

「そんなバカな！」なぜなら、今までテレビや映画で何度となく見てきた忠臣蔵では吉良上野介は極悪非道の悪人であったし、これは十二月十四日の義士祭に象徴される日本の常識(少しおおげさかな)だとさえ思っていたからである。ところが娘の話によると、吉良上野介とは禅学に通じ茶道の奥義を極め、また歌人としても優れるなど、政治的にも文化的にも名君として誉れ高かったそうである。信じられないことだなあと私は一人で不思議がっていたものである。

それから数ヶ月後、娘の言った吉良上野介善玉説はたぶん出身地域の人々の身内びいきだろうと思いつながら、NHKの大河ドラマ「峠の群像」を見てみると、悪玉であるはずの吉良をなんとあの伊丹十三が熱演しているではないか。すると今までの考えとは違って変わり、我が郷土の星が悪役など演ずるはずはないと思えてくるのはなんともかつてなものである。

立場が変わればものの見方も変わってくる。正にそのとおりである。そういえば正月に娘

から「こちらのおもちは四角いのよ」という電話があり、丸いもちがないのが不思議でたまらないと言っていたのを思いだした。自分のおかれた環境が正常だと思いに慣れると、それ以外の面でもものを見ることのできるようになるのが人間である。吉良上野介の善玉悪玉説はともかくとして吉良町に住んでいる人々は、なぜ日本国中吉良を悪人と思うのか不思議でしようがないのではなからうか。

シルバーエイジの転心

政 本 邦 興 (松山)

多年の懸案であった趣味の四国藩札史(六冊)と、東亜貨幣史年表並びに図録(四冊)の編集に続いて新聞切抜帖を再整理し、無病長生雑学事典(三冊)の編集をするなど、ここ半年緻密な作業の連続がたたって眼の調子が狂いショックを受けたがそれもどうにか回復した。やはり歳、無理はできない。お蔭でいろいろと考えさせられた。

かつて四十七年に私が出した「ハサミ片手に人生修業」のチャチな本の冒頭に載せた好きな言葉、齡五〇を過ぎて私の心にしみる金子光晴の次の言葉が今また前に私を捉えて離さない。第三の人生は今までなおざりにし勝ちであった日常茶飯事を大切に、体臭を一新して一つ一つゆっくと噛みしめ味わい乍ら進めてゆきたい。

人間は随分がつがつして生きているものだと思う。

そして本当になまなましくして滋味のある生活の実体は、人が殆ど無価値のように思っ素通りする食べたり、寝ころんだり、庭を眺めたり、子供と遊んだり、抱き合ったり笑ったりという日常茶飯事

にあるのではないか。……

そこで私はこの頃生活のうえの重点を移動させて、日常のくだらない末末のことに主眼を置いて、その日その日を生き抜いていくことを心掛けていた。お蔭でずつと人生が豊富になったような気がする。

飯を食うにもゆったりと放尿の快をかみしめるにもゆったりと放尿の快をかみしめるといった調子だ。

自然や人間同志の忘れていた愛情も取り戻されて、もう一度自分のものになった気がしている。

とは言うものの人間いくつになっても仕事は生活の中心。いつまでも夢と希望をもって日々新たに、現在の中で未来を買い続ける基本理念は捨て切れないうちもせめてその心積りで、日に対処してゆきたいと思う今日の頃です。

一病息災

森 常夫(松山)

昨年退職してから健康を害し、第二の人生のスタートは必らずしも良好とはいえなかったが、漸く体の調子も戻ってきた。ふりかえると、車の運転免許をとるため、教習所通いを始めた頃から調子が狂ったのである。

車の運転は前からの念願だったので、大方の反対も押しきって練習を始めたのは昨年の春だった。運転ぐらいいは……と思っていたが、思うように進まないのである。こんな筈ではなかったがとあせっても、手足がスムーズに動かない。思いあまって、医者に診てもらったら、持病の糖尿病が大分悪くなっているの、入院した方がよいとのことである。時がただにシヨックだった。とにかく命あ

ったの物種で、早速入院し、一月程でどうやら退院はした。

しかし、完治する病気ではない。ストレスに響く運転免許は諦めようかとも思ったが、思いきって続けてみることにした。ところが案外調子がよくて、夏には免許証を手にすることができたのである。

どうやら病気のせいで体が動かなかったらしい。健康の有難さをしみと感ぜ、それまでの生活を大いに反省した。とにかく手遅れになる前に気がついてよかった。糖尿病はこわい病気だが、それなりにコントロールすれば案外長持ちするものらしい。よく「無病息災」というが、私は「一病息災」でいくしかない。病気を怒らさないように仲よくつきあって、楽しく生きたいと思うのである。

生涯の宿痾いとほしちちる虫 翠雨

大和路の旅

原 田 照 男(三本松)

十一月二十九日朝五時、心配していた雨もやみ薄靄のたちこめた奈良公園入口に到着した。すがすがしい朝である。公園はまだ開いていない。小鳥がうすら寒い梢を飛びまわっていたが、私たちの傍まで降りて来る。餌を探しているのであろうか。

間もなく開門となったが一番乗りのためか客はまばらであった。

案内人の先導で園内を歩きはじめたら早速鹿が出迎え、ついてきた。軽妙な案内人の説明を聞いていると「案内人のきまり文句や秋深む」の感が深い。鹿の群の中の仔鹿が「頭ヨチヨチとどこまでもついてきていたが、春日大社の山門近くで消えていった。

ようやく陽が昇りはじめた。シャッターの

音がしきりに聞える。春日大社の朱塗りの神殿を撮っているのであろう。国立博物館にはいる。私は仏画、古書、古文書に特に惹かれ心に残しながら人影のなくなった博物館をとび出したが、同行の中で私がしんがりだったらしい。二月堂、三月堂を経て天理へむかった。天理の参考館の規模の大きいのに驚いた。私もインドネシアの象形の仏像を持っているので、参考館の象形石仏には一入興味を持ち、もう一度ゆっくり見たいと思った。

つぎの日は飛鳥古墳をみた。石舞台の古墳は曾我のイルカの墓と伝えられているが、機械のなかったあの時代によくもあれだけ大きな石が運べたものだと思う。

高松塚古墳の壁画、青邨の模写もまた精巧の一語につきる。古い時代を生きた人々の旺盛な活力が今に残る思いに駆られながら飛鳥寺に向かう。日本最古の寺と伝えられるこの寺の国宝の大仏と、板の間に座られて説明をなさった老僧のお姿が極めて対照的であったこと、またこの小さなお堂にどうやってこの大きな大仏さまを収めたのかなど、帰りの車中まで考えさせられた大和路の旅であった。

新春福便りの碧空会

森 谷 岩太郎(高松)

一昨々年の喜寿の誕生日である十月十五日に、偶然にも知事公室から『知事対話』の県政番組に招かれた。この日は県の課長さん方も臨席され予想以上のものものしさに些かとまどい気味の私に、劈頭知事さんから「喜寿のお誕生日おめでとう、拙筆だがお祝いのおしるしに」と、知事直筆の「寿」の色紙をいただき吃驚仰天。実はその朝定刻三十分前に出庁し、担当主査の方と時間待ちの席で、今

日は私の誕生日に当る、と洩らした一言が、早くも手廻し良くこの様な仕儀になったもので、有難い二重の光栄に感謝一杯のうちに知事との対話が始められた。

その対話の中で、明治生れで老壯の旧通信OBで一団を組み、県政バス利用制度を活用している団体のレベルアップの一助としたいと申しあげたところ、知事さんは非常に喜び両手を上げて賛意を表し、是非実現していただきたいと激励して下さったので、必ず結成いたしますとお約束をした。早速その晩から精魂を傾けて草稿の作成や同志の人選にかかり辛うじて年末に印刷物ができあがってきた。

人選はバス一台の五十名を目標に一人一人のお顔を思い浮かべながら年賀に託して五十八人の方に印刷物を封入した封筒を書き終ったのは、年の瀬も迫る二十八日であった。

明けて正月、折返し福便り、を待つ半月は長かった。しかし遂にやった。誠意は通じた。期日までになんと五十五名の参加申し込みを得ることができた。喜びに震え乍ら顔ぶれを見て吃驚、かつての通信部長がお二人、局長、次長、課長、特定郵便局長合せて三十九名のお歴々がいらっしゃる。知事さんとお約束を果たし得て私はひそかに感涙にむせんだ。良い友人が居ること、そして信頼されることは無上のしあわせだ。感激の樽太鼓が心底に鳴り響く思いがして、自重、献身、努力を強く自分自身に誓ったのであった。

会は目出度く結成され碧空会と名づけた。あれから満二年。昨年十月に第七回目の見学会を催すことができた。知事さんのご挨拶をいただき、市長からは激励のお言葉と金一封を贈られた。会員は順調に増え現在八十五名、内女子二十名の花も実もある碧空会に成

長した。

本会は、肩書きを脱ぎ捨てた裸のお付き合いで、会則会長は設けず置かず、会費は定めて都度実費を各自負担とし、見学日以外の社交儀礼は一切行なわない。だが見学日当日は五十年前の昔にかえり、手を撃ぎ楽しく笑い合うあたかも今浦島とも言える碧空会である。本会の会員及び家族の福祉にご協力下さっているグループがある。市内目抜き一流の八十店が碧空会指定賛助店として会員券を発行し、犠牲をかえりみず、特別割引制度を設けて応援して下さいとお願い、本当に心豊かな碧空会である。

あの日の時

山下

茂(佐川)

昭和二十年八月六日午前十時前のこと。その頃私は大阪中央電信局外信課検査部主事としてストックホルム線を受信した千五百語程の大阪毎日新聞社宛の新聞電報を、鳥取県出身横浜外大卒の筒井憲兵軍曹と二人で分担検閲していたら、bombard on Hiroshima by atom-bomb という語があったので、筒井軍曹に「原子爆弾ちゅうたらどんなものや」と聞くと「なにっ、こりゃいかん」と言って電報をポケットに押しこみ「司令部へ行ってく」とそそくさと出て行った。

十五日、私は夜勤で昼間は家にいたので家主宅へ出むいて行った。私の家族は当時既に高知県へ疎開させており独り身のわたしはよく農家の家主のうちへ遊びに行っていた。

この日、陛下が降伏のラジオ放送をなさるのを家主夫婦と三人で泣きながら聞いた。殊に家主の奥さんの高い泣き声がいまだに耳に残っている。

十七日午後、守衛室から面会人という電話があった。出てみると筒井軍曹が丸腰でアメリカ軍のジープの脇に立っていた。ジープにはアメリカ兵が二人、ジットこちらを見ていた。「元気でな!!」たった一言の別れであった。アメリカ軍が肥後橋ビルへ裁判所を設けたと聞いたが、そこへ引かれていったらしいが結果はわからない。戦争に破れた男達は惨めだ。敗戦のショックと栄養失調で働く気力も失う。アメリカ兵に身を捨てて金や物を乞う女達を見ても怒る気力さえ失っていた。

食べものを求めて自己を失う敗戦のながい記憶は、拭いても拭いても失えてゆかない。

四月に思う

横山 竹義(松山)

毎年各地から春の花便りが報ぜられる頃になるともう四月が来たと思うとともに二十一日を思い出す。今から三十七年前の昭和二十年四月二十六日は今治が第一回の空襲をうけた日である。「三十余発の爆弾が投下されその中の一発が交換室屋上に命中し、落下点近くで作業中の交換手九名が即死、一名は病院収容後死亡、十名が重軽傷を負った」と四国電信電話事業史(昭和三十五年十月四国電気通信局発行)に記されている。

今治局に勤務したことはない私が職務上で種々のつながりを持つ因縁に結ばれていた。最初は今治市寺町の西蓮寺で合同慰霊祭が行われた際礼拝させていただいた。次は前記事業史の編集委員の一人として殉職者の項の原稿の一部作成を受け持った。

昭和二十四年六月の電通、郵政二省分離の際、書類は全部郵政局で保管されていたので松山郵政局へ出向き古い書類を調べさせても

らしい、今治局空襲当時の関係事項の抜き書きをした。その頃今治電報電話局は局舎新築工事が進められており、付帯工事として構内に殉職者の慰霊碑が建立されることになっていった。秘書課にいた私がこの事を聞いたのは本庁舎が完成し間もなく付帯工事が初められようとしていた時で、碑は岡山県産の万成石を採用することが建築部で決まっていただけで細部については決められておらず、碑の具体的なことについては早急に決定する必要に迫られていた。そこで通信局及び今治局の関係者が幾回も協議して決定をみたように覚えている。題字は大橋総裁、撰文は大山澄太先生、書は文書広報課の栗栖福三（現二科会員）さんをお願いすることになった。碑面、花筒、線香台など用紙で実物大の型を作って机の上で前後、左右に動かして、デザイン面に堪能な栗栖さんのお智慧を借りた。一方、たまたま私と同時に上京していた横井今治局長さんと一緒に、東京墨田電話分局（現在電話局）の慰霊碑を拝観にも行った。がここの慰霊碑は棒状であったためと、敷地の関係もあって参考程度にさせてもらった。

慰霊碑の除幕式は昭和三十六年十二月二十六日、十七回忌慰霊祭を兼ねて行われたが、その模様は各新聞が詳しく報じた。

終りに、同年八月一日に今治局で慰霊碑関係打合会議を行った際の、横井局長さんのお言葉を拝借して殉職者ご一同のご冥福をお祈りしたい。

「やがて当時の職員がいなくなっても、今治局は尊い生命をかけた殉職者が守ってくれているのだという……中略……必ず命日にはお花が誰からとなくあげられるようになることを念願しております。」

表紙のことば
三月 雛 莊野 丹秀（内海）
嫁ぐ日の噂もありて桃の花
そんな句を想い出す。
新妻の初節句には、金時絵の重箱に紅白の餅を入れて近所にくぼったものである。その上に桃の小枝がのせてあった。ほのぼのとした句いをただよわせて。

川 柳

合 田 勇（松山）
いたづらをするとは見えぬ子の寝顔
酒がでていつやら顔を出す本音
好物を亡母へ供える 三回忌

俳 句

高知やまもも句会

綿菓子を目にかがやかせ初詣
時雨るるや北に重なる山幾重
新暦掛けて華やぐ老の部屋
山の鳥来てなくなりし木守柿
小春日や空青々と雲遊ぶ
釣上げてちらと人見ね寒釣師
土間に座す丸背翁や注連作り
くつろぎし淋しさ残る三日かな
磯釣りに来て初日の出拝みけり
神棚のみあかしゆらぐ隙間風
松籟や湯気ほのぼのと初点前
枯菊の残る副木の青さかな
頭を深々うづめ年の市
枯草燃す火に立寄りて行く遍路
佗助や不在の家の男下駄

大西 瓶子
小笠原芳子
岡村 とき
溝淵乃文字
石川 房子
小松としみ
岡崎 花子
青木 雪枝
道倉ただお
野村 俊
大田 佳代
安村 幸子
別役 淑
近森三千代
柴田マサ子

投 稿 規 定

- 一 会員消息 四〇〇字以内
 - 二 短歌、俳句、川柳 五首又は五句以内
 - 三 随筆、随想 六〇〇字以内
 - 原稿締切 五月一〇日
- 原稿の取扱についてはお任せねがいます。
- 田内 露風
井上すみ子
井上ひろし

編 集 後 記

▽私ども退職者の最も関心を寄せている共済年金について、国会は一兆円減税の与野党攻防のあふりて空転が続き、改善の朗報をお届けできないことが残念です。改善される情勢になってはおりますが、改善実施時期が五月になることも予想されますので、審議の結果を皆様とともに注目してゆきたいと思えます。▽沢山の方向からご投稿下さいまして厚くお礼申し上げます。編集上紙面の関係等ございまして多少手を加えさせていただきます。次号にまわさせていただきます。お詫びいたします。

電友会四国連合会会報 第三八号
昭和五十七年四月一日発行
編集発行 電友会四国連合会 事務局
松山市一番町四丁目（二七九〇）
四国電気通信局内
電話（〇八九九）三六一二〇二三
印刷 四国電話印刷株式会社